



歴史的な 122 cm 望遠鏡とドーム。右手後方が戦没者慰靈塔。

ん。イタリアは日本と気候が似ているので、野菜、果物、魚介類、などは日本のとほとんど同じ物があります。現在では、もう厳密には守られていませんが、キリスト教では魚は金曜日以外の日には食べてはいけないことになっているのだそうです。そのため、アジアゴのような田舎の町では、今でも魚屋は金曜日の午前中しか店を開きません。だから金曜日には、いつも早起きをして魚を買いに行きます。イワシ、サバ、いか、あさり、などがあります。うなぎもあるけれど、これはこちらでも高いし、青大将の兄貴みたいなのをぶつ切りにして売っているので、あまり買う気になれません。先日はイワシを大量に買ってきて、宿舎の窓につるしておいて、丸乾しを作りました。イタリア人は「あの魚のカーテンはなん

だ。」なんて言って驚いていましたが、実際に一つ焼いて食べさせてやったら「意外とおいしい。」と言っていました。食べ物の好みなどでも、それほど極端な違いはないみたいです。もっとも、これも細い点では色々違ったって、時々、返答に困るような質問をされることがあります。例えば「なぜ、お前は御飯を炊く前に米を洗うんだ。」とか「なぜ、焼き魚を食べる時にサラダ油をかけないのか。」とか。イタリア人にとっては、焼き魚に油をかけないで食べる原因是、刺身にたれを付けないで食べるようなものらしいです。それから、日本からお茶を送ってもらった時など、少し飲ませてやったりしましたが、「絶対に砂糖を入れなくちゃいやだ。」なんて言うから、最近はもう飲ませてやっていません。

まあ、色々な事はありますが、2年間生活してみた感想は「人間のやる事なんて、何処へ行っても同じだな。」という事です。日本人はどうも、自分達は非常に特殊な人間で、日本でやっているような事は外国では通用しないのではないかなどと考えがちですが、そんな事はなさそうです。最近は安定指向とでも言うのでしょうか、若い人の間でも「外国になんか行きたくない。」と言う人が多いみたいですが、もっと自信を持って、どんどん外国へ出ていって、国際的な場で仕事をやってみたらどうでしょうか。若手の奮起を期待したいです。

それでは皆様、ごきげんよう。さようなら

1980年8月31日

## 学会だより

### 日本天文学会昭和55年度秋季年会記事

昭和55年度秋季年会は岩手県水沢市の水沢市役所講堂に於て 10月21日(火)~10月24日(金)の4日間にわたって開催された。講演数 139、出席者数約 250名、各セッションの座長は次の方々にお願いした。

21日午前 古在由秀、小平桂一 (講演数 18)

午後 会津晃、奥田治之 ( " 23)

22日午前 杉本大一郎、加藤正二 ( " 17)

午後 高瀬文志郎、小暮智一 ( " 24)

23日午前 藤本光昭、坪川家恒 ( " 17)

午後 須川力、堀源一郎 ( " 23)

24日午前 高倉達雄、平山淳 ( " 17)

10月21日の昼に内地留学奨学金選考委員会、22日夜には懇親会、23日の昼に理事会が開かれた。24日の午後にはエクスカーションとして緯度観測所江刺地球潮汐観測施設の見学会が開かれ参加者は約 40名であった。

### 内地留学奨学金

年会中に開かれた内地留学奨学金選考委員会において申請のあった4名の候補者について選考を行った結果、次のように決定した。

◎藤森賢一 (農業)

研究題目: 「プロミネンスの活動と黒点活動の周期性について」

留学先: 東京天文台太陽物理部

奨学金: 18~20万円

### 昭和56年度科学研究費補助金配分審査委員候補者

日本学術会議研究費委員会より標記の件について推薦の依頼がありましたので、本学会として評議員の書面投票により下記の方々を推薦いたしました。

第1段審査委員候補者: 小平桂一、高瀬文志郎

なお、現在の第1段審査委員は、加藤正二、高窪啓弥の両氏、また第2段階審査委員は川口市郎氏です。